番地（現在の銀座三丁目二番のプランタン銀座付近）に居を構え、多忙な勤務の傍ら松山棟庵等と日本初の私立医学校である成医会講習所（成医学校→慈恵医院医学校→東京慈恵医院専門学校→東京慈恵会医科大学）を開設し、その所長となる。十五年には日本最初の民間施療病院である有志共立東京病院（後の東京慈恵会医院）を設立し、イギリス風の実証的な症例に即した医療の普及に尽力している。

高木にとって明治十七年は非常に意義深い年であった。脚気病が江戸以来の国民病であるだけではなく、多年、海軍の将兵を悩ませ航海や戦闘に支障を来たす程に毎年蔓延していた。当時の医学ではビタミンそのものの存在が確認されておらず、ビタミンB_1の欠乏によって発症するという原因は分かっていなかった。しかし、高木は、イギリスなど西欧では脚気病の症例そのものを見ることがないことや、多数の症例を分析したり、職を賭して行なった航海実験等から、脚気が滋養欠乏からくるものであることを実証的に判断した。その結果、それまでの白米中心の米飯食であった量食を、麦飯・パン食に改めることによって海軍将兵の脚気予防に一期を劃した年であった。

また六月には有志共立東京病院の運営援助のために伊藤博文夫人や井上馨夫人、松方正義夫人等を中心に設立された「婦人慈善会」が、鹿鳴館に於いて日本最初の慈善バザーを開催している。当時、海軍軍医本部長兼軍医学舎長であった高木は公私共に多忙であったが、その余暇には自宅でも診療を行なっていたのだろうか。この銅版の処方箋はそれを物語っているようである。

このように明治十年代に入っても、近代化の最先端を行っていた銀行や資生堂が、その印刷物にまだ江戸以来の玄々堂風の素朴な銅版を使用していたのがうれしく、思わず蒐集品の一枚に加えた訳である。

生命主義と生活のモダン――帆足理一郎をめぐって

森　仁史

二十世紀初頭の日本の芸術を振り返るとき、確かに鈴木貞美が「大正生命主義」と名づけた範疇に収まる文学、造形作品を思い浮かべることができる。ただ、この生命主義という用語は同時代に表現者たちの間に広く共有されるほどには一般的ではなかったことも事実である。鈴木は『「生命」で読む日本近代』（NHKブックス、一九九六年）のなかで、この始原を田辺元がリッケルトの名づけたBiologismusの独自な翻訳語として「生命主義」を用いたことに求めようとしている。『改造』大正十一年（一九二二）三月号に田辺は「文化の概念」を執筆し、このなかで明治に文明が称揚されたのに対して大正には替わって文化や文化生活が登場していることを指摘して、この差を明確にするために「生命主義」の語を用いたのだった。田辺は当時世に語られている文化の語が人が生きるに際しての物質生活や自然科学の応用以上に、心身の活動が包含されていることを指摘し、この傾向を生命主義と説明している。田辺によれば、こうした主張にはショーペンハウアーやニーチェ、さらにはベルグソン、デューイら反主知主義的な哲学が含まれている。しかし、ここに挙げたすべての哲学者の主張が生命主義と呼ばれていたわけでもない。例えば、ベルグソンの主張は大正初めに「創造的進化」として広く知られ、それを推進できるのは「生命の本源的衝動力」elan vitalなのだと紹介されていた。この主張は神原泰（一八九八―一九九七）ならずとも芸術家にとっては啓示となってしかるべき発想であった。これを本格的に紹介したのが金子馬治・桂井當之助共訳になる『創造的進化』（早稲田大学出版部、大正二年）であった。だから、生命主義という捉え方自体は受容する日本の側で概念を明確にする必要から設定された

側面が強い。

この時期にベルグソン以外にも生物の根源的な力を強調する思想が現れたのには幾つもの理由がある。第一にはヨーロッパにおける第一次世界大戦の勃発である。日本からははるか遠い彼方の戦争ではあっても、かつてない規模と世界の破滅すら想起させた戦闘は欧米人だけでなく、それを目標に歩もうとしていた日本の知識人にも深甚な影響を及ぼさないではおかなかった。第二に進化論の登場による神によらない生物進化の摂理への認識がある。これは一方で科学の限りない有効性を確信させると同時に、神以外の宇宙的意志の存在を想起もさせた。日本に照らして考えれば、明治初期の欧化から十～二十年代の国粋化、さらに三十年代からの日本的な近代化の再確認と自信獲得の過程の次にこの時代が到来したのである。

時代はもう少し下るが、生命主義を主題として文章を発表している哲学者がいる。それが帆足理一郎（一八八一―一九六三）で、彼は大正七年（一九一八）アメリカから帰国直後に同志社大学から誘われたが、海老名弾正の指示で東京に留まり石原謙の後任として早稲田大学に着任した。峰島旭雄の研究によれば、帆足は明治三十五年（一九〇二）に渡米し、四十五年南カリフォルニア大学を卒業、大正六年シカゴ大学ディヴィニティ・スクール組織神学科に博士論文「現代神学における〈全能〉の問題」を提出し、学位を取得した。日露戦争直前に渡り、第一次世界大戦直後に帰国したことになる。

東京専門学校（明治三十五年から早稲田大学）では明治二十三年（一八九〇）に文学科が設けられ、三十二年に文学科の分科として哲学及英文学科が設けられていた。この基礎を築いたのが大西祝であり、彼は日本の哲学に近代的枠組みを与えた丁酉会のメンバーであった。この早稲田大学の哲学者たちには先にあげた金子馬治を始め、現実社会と自己とが切り結ぶ関係、いわば人生論的な傾向が目に付く。この意味で帆足が早稲田で教鞭をとることは違和感がないように思われる。彼は滞米中の大正五年（一九一六）に最初の著作『宗教と人生』（新生堂）を出版して以降、昭和十三年（一九三八）までの二十年余りに二十七冊の著書を公にしている。これ以外にも妻との共著が一冊と訳書が二種、選集が一冊ある。さらに昭和六～十年には個人誌『人生』を発行していたのだから、全く凄まじいばかりの活動量である。

帆足の論文は「生命主義の神観及び人生観とその根本意識」と題され、早稲田大学の『フィロソフィア哲学年誌』第四巻に昭和九年（一九三四）十二月に発表されたものである。彼はH・A・オヴァストリートを援用して、宇宙に「いかなる神でも、神ありとすれば、神は吾々の内に躍動する神であらねばならぬ。神は吾々の本質的生命であり、吾々は神の本質的生命であらねばならぬ。」と規定し、「宇宙的大生命」観に基づこうとする。これに沿った進化の実現は「官能の与へる感覚即ち直感を基礎とする外ない」のだ。この宇宙の自我意識に発する成長発展は「互助の原理、愛の原理」に基づくものなので、社会的闘争とは相容れないとも主張する。このてんで社会主義の存在を意識しながら、それとは異なる「創造的進化」に従おうと呼びかける。

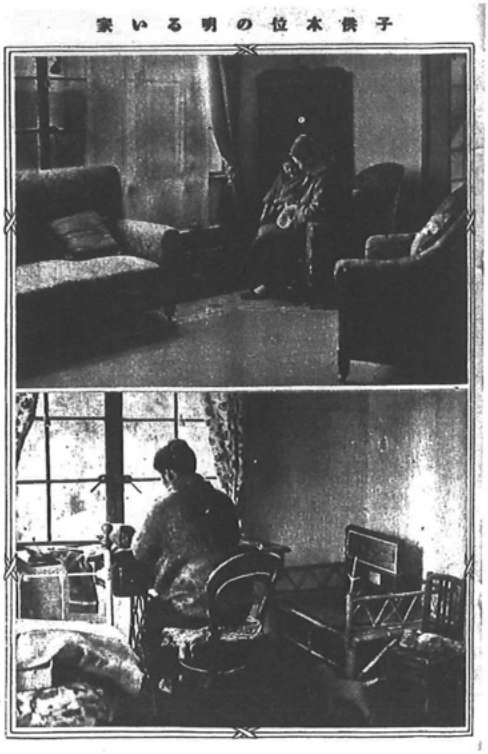
大正十年に帆足が公刊した『哲学概論』（洛陽堂）は彼の早稲田での講義を補訂したものなのだが、彼はこんなふうに宣言している。

吾等の哲学は誠に進化論的見地に立ちて、之を徹底的に突き進め、進歩発展の信条を歎美し、一切の衆生に潑剌たつ生命の躍動あるを見て歓ぶものである。げに、吾等の哲学は生命主義、活動主義の哲学であつて、吾等は一切の享楽と耽溺と徘徊趣味とを擲ち、絶間なき想像の努力、建設の努力に緊張した奮闘的の精神を鼓吹せんと期待するものである。

いまならば、進化論の科学を信仰の信条に接木することは根源的な齟齬でしかないと指弾されるかもしれないが、一九二〇年代には双方が新しい世界観を切り開く論拠になりえていたのだ。またこの記述からすると、生命主義という自己規定は帆足の講義のごく初期から登場していたと考えてよいようだ。この図書も発行一年で十三版を数えている。

帆足が大きな支持を得たのには、現実社会での活動においても支持され

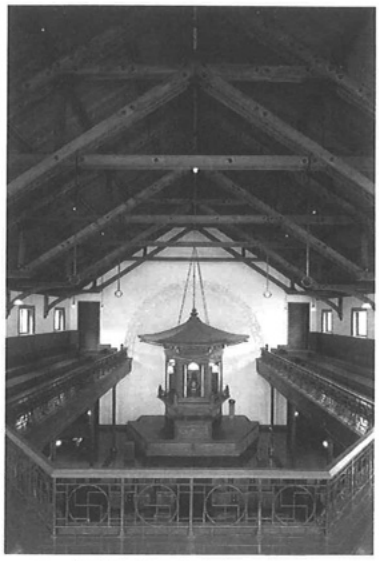
たところが大きいように思える。帆足は大正八年五十嵐みゆき（一八八一―一九六五）と結婚したが、彼女は浄土宗の尼僧になった後、日本女子大を卒業し、仏教布教のため渡米し南カリフォルニア大学に学び、ここで帆足と知り合い、還俗して結婚し帰国したのだった。二人は落合に新居〔図1〕を構え、理想を実現すべく新しい住まい方、生き方を実践しようとした。帆足みゆきも婦人雑誌などに積極的に新時代の婦人として発言を続け、二人の共著として『婦人解放と家庭の聖化』（博文館、大正十五年）が上梓されている。ここでの主張の核心は「夫婦は一帯にして分かつことの出来ない霊的結合である。霊的な一体である以上、夫婦はよし肉体的に二個の生活体であり、各々健康や知識や才徳の度を異にしてゐても、神に在りて平等対等である。平等対等なる夫婦は益々愛によつて潔められ、互いに他の人格的向上に奉仕すべきものである。」というところのようだ。帆足理一郎の神観念はキリスト教のそれに違いないはずだが、信仰を異にするみゆき夫人と「霊的な一体」を保てるほどには幅広かったのだろう。そして、この信仰に基づいて現実を解釈し関わろうとするがゆえに、日々の生活が展開される家庭のあり方、家族の関係、生活の場としての住宅の姿が吟味され、自らの主張に基づく実践が必然となったのだろう。だから、帆足の新居が挿図に見るようにモダン・スタイルであるべき理由は明確だったのである。



1　帆足理一郎邸（「子供本位の明るい家」『主婦之友』第12巻第2号、1934年2月）

こうした邂逅がありえたのは、仏教の側にもこの時代に社会に向かって自らの教義を開いていこうと積極的に試みて時代だったという理由もある。仏教とモダニズム造形という結びつきとしては〈求道会館〉（大正六年、現存）〔図2〕が挙げられる。この建物は浄土真宗（東本願寺）に属する求道会を率いていた近角常観（一八七〇―一九四一）が建設したのだが、近角は真宗大谷派給費生として明治二十二年（一八八九）東京帝国大学文科大学哲学科に入学し、三十一年卒業後は宗教家として活動した。〈求道会館〉を設計したのは武田五一（一八七二―一九三八）であるが、彼に依頼したのは京都第三高等中学校以来武田の親友だった荻野仲三郎（一八七〇―一九四七）が仲介したからだった。荻野は以前から近角に深く帰依していた。武田は京都高等工芸学校に赴任する準備のため明治三十四～三十六年にヨーロッパ留学に派遣され、丁度彼の帰国した頃近角が新しく信徒が集う会館建設の必要を感じていたようだ。同時期（明治三十三～三十五年）、近角も本山から欧米宗教事情視察を命ぜられ、ＹＭＣＡや救世軍の活動に大きな刺激を受けていた。それで近

2　求道会館正面　1917年



3　求道会館　会堂内（2階から）

4　『求道』第4巻第1号、明治40年

角がつけた注文は「耶蘇教会のように見えても困るが、さりとて従来の御寺の様な風に見えても困る、また普通の煉瓦造りでも困る」というものであった。時間はかかったが近角は布教活動によって寄付金を募り十四年後に会館を完成させることができた（以上は近角櫻子『求道学舎再生』による）。経費節約の必要もあって、きわめて端正で威厳よりは清涼感を感じさせるファサードを目にして会堂に足を踏み入れると、屋根まで広がる開放的な空間の正面に壁に半分埋め込まれた六角堂とそれを囲む半円形の唐草模様の光背が目に入る〔図3〕。神々しいというよりは来るものがやわらかく抱擁されるような造形である。これらはいずれの宗派の形式にも依らないが、日本の古代文化を確実に継承しているが故のリアリティを備えていて、このことが今なお見る者に魅力を感じさせるのではないだろうか。武田の文化遺産に対する学習とヨーロッパ建築理解の双方があってこその造形のように思う。武田はこれ以外に近角らの機関誌『求道』の表紙〔図4〕を明治三十八年から大正三年までデザインしている。ここにも武田の古代文化研究の成果が発揮されている。

この時代に互いに似通った精神主義的な思想の輩出する背景を姉崎正治（一八七三―一九四九）は『新時代の宗教』（博文館、大正七年）で的確に把握し分析している。姉崎の見解では、明治維新直後宗教は廃棄され、西欧排跪が横行し信仰が衰えたが、日清戦争後の経済恐慌は「迷信的新宗教」をうみ、日露戦争後にも人心の動揺はあまたの預言者の登場を招いた。その後、明治天皇死去後の陰鬱と思想的抑圧は人々を「個人修養」――静坐法、呼吸法など――に駆り立てた。第一次世界大戦は将来への危惧を人々に抱かせ、「この不安が信仰問題に現はれるのは固より必然の勢いである。」と述べている。つまり、生命主義はこうした時代風潮の必然であったとすべきだろう。

姉崎はこのとき東京帝国大学教授として宗教学宗教史講座を率いていたが、明治二十九年（一八九六）東京帝国大学文科大学哲学科を卒業し、大学院を経て三十一年から同大学講師を務めていた。三十三年からおもにドイツ（キール、ベルリン）で修学し、ここでは巌谷小波と親しくつきあった。そこから移ったロンドンでは土井晩翠と隣り合って住まい、京都第三高等中学校で一年後輩の武田五一とも親しくつきあった。姉崎がロンドンでもっとも多く通った博物館はテイト・ギャラリーであり、とりわけロセッティとワッツを愛した。クィーンズ・ホールではワグナーを多く聴いたという。インドを経て帰国したのはアジャンタ、ベナレス、ダージリンなど仏跡を訪ねたからで、三十六年帰国した。姉崎は仏光寺絵所の出自をもち、このことに自身も意識的であり、彼の留学時の文学芸術への関心のありかが赴いた足跡に表われているように思う。また、近角は姉崎の二年後輩で、ベルリンでは親しかったようで、武田をめぐる両者の関係も興味深い。

彼等はこののち大正十二年（一九二三）関東大震災によって、もっと直接的な危機を体験することになるのだが、その後の一九二〇年代が具体的な変革の時代であるとするならば、これ以前の二十世紀初頭の日本はいわば思想的な迷いを深刻に健全に悩む時代だったように思える。同時にこの

一寸

第四十二号　二〇一〇年六月

第四十二号目次

新・旧刊案内42　青木　茂　1
横田洋一稿「五姓田義松とハインリッヒ・フォン・シーボルト」への補遺、根岸武香のことなど
貸本出版の樋口隆文館、あるいは関西の挿絵・長谷川小信のことなど　岩切信一郎　8
行方不明後の《藤牧版画》の足跡（12）　大谷　芳久　15
—小野忠重とは—
近代日本画の構図決定格子（八）　金子　一夫　31
—江戸期絵画概観、南画、林十江—
よくわかった明治十年代の小切手と資生堂の処方箋　丹尾　安典　35
銅・石版画遺聞37　森　登　40
生命主義と生活のモダン—帆足理一郎をめぐって　森　仁史　45
■装幀本談義　花のある本たち2　山田　俊幸　49
—与謝野鉄幹、与謝野晶子『毒草』—

新・旧刊案内42

横田洋一稿「五姓田義松とハインリッヒ・フォン・シーボルト」への補遺、根岸武香のことなど

青木　茂

■美術作品の製作期間、著作物の初めと終りは、短時間のこともあれば数年に渡ることもある。アトリエに立つ彫刻の、本質にとっての贅肉を時々削ぎ落としてほとんど心棒だけになって完成する造形がある。時に、あるいは何か月に一度、筆をとって色を重ねることで、深く強くなりゆく色彩の固まりが厚くなりゆく平面作品がある。藤島武二などは何年も何年も死ぬまでサインを入れなかった作品も多い。

横田洋一の最後の論文、エッセイは何か。それは

・「五姓田義松とハインリッヒ・フォン・シーボルト」（平成二十年八月八日『五姓田のすべて』展図録所収、神奈川県立歴史博物館）

であったことは誰もが知っている。亡くなったのはその年九月二十二日だった、展覧会は横浜でまだ開催中だった。迂闊なことに最近になって僕は新刊本屋で辻惟雄編著の『激動期の美術』（二〇〇八年（平成二十）十月三十日、ぺりかん社）という図書に横田さんの「五姓田芳柳・義松親子の見果てぬ夢」という論文が収められているのを見てびっくりした。二、三日して古書即売展で会った共著者の児島薫さんに「あんたはいつ書いたの」と聞いたら、十年ほど以前という便りと共に本まで恵送された。編著者の論文も「確か一九九七年頃ぺりかん社に届けられた」とあり、共著者塩谷純さんは十年以上も前の稿本を「いまあらためて読み直してみると、一九九〇年代の美術史学の状況を色濃く反映している風があって、なんとも感慨深い」となにやら懐古談である。この塩谷さん児島さんは脱稿後の新知見の処理について記しているが、誰だって心身ともに十年前の若い自分に返れ